

# 明治維新前の土佐の精神的風土と女性（その一）

柴田 静意

## 目次

- 一 はじめに
- 二 土佐文教の系譜
  - (一) 土佐文教のあけぼの
    - (1) 国府、社寺の影響
    - (2) 津野の文教
  - (二) 夢窓国師と吸江庵
  - (三) 五山の文教と吸江庵
- (1) 義堂
- (2) 絶海
- (3) 義堂と絶海の詩文
- (4) 宋儒の学と義堂
- (5) 義堂、絶海の文教と施政への貢献
- (6) 吸江の法燈と文教

（以下次号）

## 一 はじめに

南国土佐を訪れた人々は、まず桂浜の坂本龍馬の銅像の前に立つ。茫漠たる大海原の遥けき彼方に想いを馳せる彼の像から人々は何を観ずるであらうか。彼は武市瑞山、中岡慎太郎、吉村虎太郎と共に土佐勤王の四天王と称される。幕末土佐においては、こうした志士が陸続と輩出した。この現象は決して偶発的、突然変異的なものでなく必ず因があり果が存する。

そもそも土佐は、東の果から西の極み迄、重畳たる四国山脈が屏風を巡らして北の空を蔽い、南は黒潮流れる太平洋を広く抱く。この平穏な海は一旦怒れば怒濤逆巻き岩をも砕く。烈風は陸を蹂躪し、大木を根こそぎ倒し家々を襲撃する。台風銀座に位置した土佐人は例年の如くこの被害に耐えてきた。平素は南方特有の空は飽くまで碧く、北国の如き曇天は幾日も続かない。その碧空が一天俄にかき曇り篠突く雨が地面を叩く、と間もなく、からりと晴れ再び碧空が拡がる。こうした土佐特有の気象が独特な土佐人氣質を形成してきたのだと考えられる。

このように土佐は峨々たる山なみと前面に荒海を控え都から遠い南海の孤島の如き国であったので、古来より遠流おんるの地とされた。上は池田親王、土御門上皇、尊良親王をはじめ紀夏井、菅原高視（道真の子）源希義（頼朝の実弟）法然上人ら天下一流の人々が数多く配流された。<sup>1</sup>これらの人々は朝廷の党争の犠牲者、或は縁坐による者、武家専横の犠牲、讒言などによるなど、痛恨のおもいで配所の月を眺めた。その中で都へ還れなかった人々は土着の土佐人の血の中へ入り、彼等の無念のおもいは子々孫々に伝わり、権力への反骨精神となつて温存されてきた。これらの人々の多くは都における最も文化的素養を有する「時の人」であり、土着の人々にとっては、これら文化人を通して遥か

な都への文化の憧れと開眼とがもたらされた。

他方、源平合戦の果、敗者、平家の一族が落人として土佐の山間に身を潜め隠れ住んだ。これらの人々は、ひっそりと同族だけの文化圏を構成して何代も生き続けたが、時代が下れば自然と土着の人々と融合一体化して、遠流の人と同様反骨心を燃やす人々となった。

また応仁の乱では、名門五摂家の一つで前関白一条兼良の長男、左大臣前関白一条教房が戦乱の都より、家臣団一統を率い大挙して自家の莊園、土佐幡多の中村へ下向し数代に互って公卿大名として栄えた。<sup>(2)</sup>当時、都の動乱を避け各地に四散した月卿雲客数多い中でも、これ程の都人が大集団で地方に下り京になぞらえた街づくりまで行って、みやこの雅をその地に華開いた例は珍しく、百三十余年の治政下で文教面でも血脈の上からも土佐人に及ぼした影響は看過できない。<sup>(3)</sup>

以上みる如く、土佐特有の氣候、風土、歴史、伝統に加え、土佐は古より建依別<sup>たけよりわけ</sup>の国と称し、尚武の氣風横溢し、これらが互に交錯し、粗獷、剛健、反骨精神旺盛な土佐魂が醸成されてきた。

しかし、これのみではない。この土佐魂に更に筋金を通したのは、土佐に伝わる文教であって、この精華が強靱な氣質を形成して、男女を問わず、学問の有無に係らず土佐人すべての血となり肉となって、この中に生をうけた人々の骨の髄まで染めあげた。時に紆余曲折はあったが連綿と伝えられた文教により、日本の国体の本質を教えられた人々が、後に、三百年の幕藩体制を揺がせて維新の鴻業をなし遂げたのである。

こうした男性の業績を記した文献や伝記は数多いがこれに反して、これら男性を陰で支えた女性の姿は殆ど表に現れていない。大多数の女性は、その墓石にさえ彼女等の名をとどめぬ例が多い。だが如何に偉大な人物でも、この世

に生をうけるには、ながく母の胎内に育まれ、その後長ずる迄その膝下で慈まれる。この時期、母の及ばず影響たるや実に、はかり知れぬものがある。また長じた後も多くの女性の陰の協力、支援あってこそ功を成すのである。

幕末、薩長と共に大政奉還の大業を遂行した土佐藩は、二藩とは異った藩の事情があった。関ヶ原の戦で、土佐の領主、長宗我部は豊臣方に味方して敗れ、山内一豊が遠州掛川六万石から土佐二十四万石へ大昇進して入国したが、その際、家臣団の増員には長宗我部の旧臣は殆ど採らなかつた。爾来、山内藩は長宗我部の旧臣に対しては懷柔と圧迫、兩政策で臨んだ。その後これら旧臣に対して郷士採りたてが行われたが、身分はあくまで下士の扱いで、上士とは厳然と差別され、事ある毎に郷士達は涙をのんだ。その身分故か、反骨精神のなせる処か、郷士達は、世襲制度の上にあぐらをかいている上士の子弟と異り、文武に精勵し、学者としても一家をなす錚々たる人物、庄屋、医者、郷士達を輩出するようになった。これら時節に目覚め国を憂い、春秋に富む身を国に捧げた人々は、殆どが山内家入国以前の長宗我部の家臣の子孫達であつたが、土佐藩における身分は恵まれなかつた。山内藩主は向学の人物多く、土佐の文教には自ら意を注ぎ、勤王の志も厚かつた。然し藩祖以来、徳川家への恩顧は深く、倒幕の道は歩めず最後まで徳川を活かす方策を採らざるを得なかつた。こゝに薩長にみられない矛盾があり、勤王の志士達の受難の因もまたここに在った。西郷隆盛は三度も島流しに遇つたが、彼が土佐人ならば三度も流されないうちに死罪になっていたであろう。嘗て宮内大臣を務めた田中光顯伯爵は「竜馬ら脱藩者四十四名中、維新後生き残つた者は私等四人だけ」と述懐している。因循姑息な藩の態度を見限つて広い天下で活動すべく脱藩した志士の犠牲も他藩に比し異常に多い。脱藩第一号の吉村虎太郎は大和、天誅組拳兵における戦死第一号で、以後、京都池田屋事件、蛤御門の変、天王山自刃、京都六角獄の処刑、土佐野根山二十三士の処刑、武市瑞山を領袖とする土佐勤王党大獄、他藩での切腹、死罪、

暗殺、戊辰の役、堺切腹事件まで含めると実に数百名の土佐人が近代日本の開幕の捨て石となっている。これらの人々は、もし後々まで生きのびていたら皆ひとかどの力量を発揮し得る有為の人材であったが志なかばにして斃れていた。しかし彼等が命を捨てて待ち望んだ明治の新しい舞台の幕が開かれた時、その実はすべて薩長にもってゆかれた。嘗て徳富蘇峰は、土佐の勤王を「土佐は薩摩の芋畑や長州の密柑畑のこやしになった」と評したが、土佐の勤王史は一面からみれば誠に割にあわない血ぬられた殉難史であったのだ。しかし損得打算を度外視した不撓の気魂をもつて、先人の屍を越えて立ちあがり、草奔の士は、その足を止めることをしなかった。この捨て石となる心意が天下の倒幕運動を促進させ、維新の黎明を招来した。この土佐人の行動を功利的に視るならば愚直とも映るであろう。しかしこれを道徳的に視るならば、それ故にこそ崇高な価値を有するのである。現代、多くの日本人が、目先の、利によってのみ動くようになってしまった社会にあつては、探しても見当らぬ宝が、この「捨身取義」の「心」である。この、身を鴻毛の軽ろきに比し、一死以て国に殉ずる至誠こそ、土佐文教が永代に互って培ってきた精神であつた。今でこそ志士とか烈士とかと称えられるが、当時は国禁を犯す犯罪人として、生殺与奪の権を握る藩から痛められ、その家族は家禄召しあげ、親類縁者との交流も禁止、人目を避けて暗黒の中を荊の道に耐えてゆかねばならなかつた。<sup>(5)</sup> 武士でありながら一度の裁きも行われぬまま斬首の刑に処せられ、三日間も晒された夫の首を貰い受けて、膝に置き、髪のをれを梳つて、柄杓の柄で胴体につないで、葬らねばならなかつた、うら若き妻。<sup>(6)</sup> 獄中の夫に死装束を整えて届け、やがて骸となつて帰つた夫を迎えた妻。<sup>(7)</sup> 脱藩を予知した家族に刀を隠され困窮した弟のため路銀、刀を与えて脱藩を助け、その責を一身に負うて自害し、家系図からも抹殺され密葬のまま時を経てようやく昭和四十三年、百七年ぶりに探し出され、はじめて墓を建てられ一族と共に晴れて眠りについた脱藩志士の姉。<sup>(8)</sup> 大庄屋として名

を馳せた大事な嗣子が、勤王運動凋落の際、意氣消沈して三十里の旅路を漸くわが家に辿りつき、正に、片足を家に入れようとした殺那、それと察し「男子たる者、一旦心に決したことを何たる様か」と叱咤激励して家に入れなかつた母<sup>(9)</sup>。未だ幼児である娘に、土佐武士道の真髓を朝な夕なに説き、人前で恥をかいたら何時でも死ねと教える母<sup>(10)</sup>。どの姿をみても女ながらも土佐武士道の死生観に徹した心意氣が背筋を貫いている。このような悲惨、無慈悲な境遇下でも土佐の女性は強く生きぬいた。剛毅な国柄に生をうけ、土佐文教の生命たる道義に殉ずる氣概と<sup>はとど</sup>進る護国の信念に燃えて、あたら斃されていった肉親の真情をおもひ、その遺志を抱いて微動だにしなかった。今日、その俗名すら記されぬ、こうした健氣な女性の墓に詣でる時、これらの人々の心情に何を以て報ゆべきか。胸が痛むのは筆者のみではないであろう。

わが国は今日、戦後四十年を過ぎ、物質的には前代未聞の繁榮をなし遂げたが、他方精神面の見直しが強く叫ばれるようになった。この秋、温故知新の示す如く、良きをとり悪しきを捨てて知、徳兼ねそなえた人材の育成こそ、わが日本民族が二十一世紀を生きぬく道であり、急務ではなからうか。

以上の観点から明治維新の原動力となった土佐文教の跡を辿り、この文教を土壌として萌えでた土佐の女性達の生きざまに焦点を当て、今後の女子教育の一助にもしたいと念願するものである。

## 二 土佐文教の系譜

### (一) 土佐文教のあけぼの

#### (1) 国府、社寺の影響

土佐に文教の曙光がさし始めたのは国司派遣の頃と思われる。聖武天皇の天平十五年より足利幕府に至る迄、国司及びその属官達が数多く中央より来任し、長岡郡国分寺村に国府が置かれた。平安朝には、かの有名な紀貫之が国司として来国している。<sup>(11)</sup> 当時の知識階級である官吏達によってもたらされた中央文教の余香が僅かにこの国にさした薄明りであつた。

雄略天皇の頃より神社が建立され、また奈良朝には僧行基により竹林寺、豊樂寺、延光寺、国分寺などが建立された。平安朝には弘法大師により金剛頂寺、峯寺、最御崎寺<sup>ほつみさき</sup>、青竜寺、金剛福寺、弘法寺、大日寺など開基<sup>(12)</sup>され、また延喜式記載の式社二十一の他、朝廷より位階を附けられた社<sup>(13)</sup>もあつた。

鎌倉時代から室町時代にかけては天下騷然として干戈おさまらず、文教の道は、ひとり叢林のみに在つた。一方武士達は、その地位向上と共に文教に志す者多くなり、地方の寺院は講学の場となつた。平安朝以来、土佐は弘法大師ゆかりの土地で真言宗が盛んであつたが、鎌倉時代の末、夢窓国師が五台山に吸江庵<sup>きやうこう</sup>を開いて以来、禅風が行われ、武士階級の死生観の修練となり、土佐の儒学と機を一つにし、なお氣候、風土とも合致して永く土佐人の精神面を左右した。

## (2) 津野の文教

土佐文教の曙光の中で、その光を鮮明にし始めた一隅がある。そこは最近迄土佐のチベットとさえ言われた伊予と境を接する山間僻陬の地、津野である。

平安朝、藤原氏の一族、山内藏人経高が、故あつて土佐へ入国したことが「大織冠鎌足公九代昭宣公基経御子仲平公御子経高公御母伊勢御御初住予州浮穴郡(中略)遷土州高岡郡津野庄<sup>(14)</sup>」として残っている。経高の母は宇多天皇の

女御であつた人で伊勢物語はこの人の真筆といわれ、後代、土佐二代藩主が、これを借りうけ永国寺で謄写させたといふ。<sup>(15)</sup>

経高は伊予より津野に入るとすぐ鎌足なりの故事に倣つて三嶋大明神を勧請し、これをこの地の開拓従事者達の精神的中核とし遂次開拓を進め領地を拡張して津野ノ庄とし、自らも津野氏を名乗り土佐豪族の魁をなした。経高は名門の出で文化的素養高く都との交流をもち、その後も処々に三嶋大明神をはじめ、神社、寺院(16)を建立して、これらを精神的根幹とする政治、文教を敷き、土佐藩政に至る迄続き、今日までもその文教の伝統は綿々と伝承されている。

津野氏は累世文教に秀で、乱世の時節、山間僻邑に在りながら文雅を嗜み、室町時代の名将、之高は十七歳で將軍義教の前で次の即席詩を賦し大いに賞されたといふ。

山川草木誠威名 弓掛扶桑四海平

今夕御筵歌舞廻 陽春一曲是歎声

之高より少し前には、津野氏一族から、五山の名僧、絶海中津を出しており、爾来、五山との係り密で、之高も五山の耆宿に儒道を学び、その子旭岑待雨は南禅寺、相国寺より土佐吸江庵に座して同郷の先師、義堂、絶海と共に後年土佐文教の基をなした。

津野は幕末、幾多の勤王の志士を輩出し、勤王村と呼ばれ、また中平善之丞など名庄屋を生むなど人材夥多の土地柄は、古くよりの津野氏文教の賜物で、誠にむべなるかなの感を深くする。

## (二) 夢窓国師と吸江庵

津野氏が栄えていた頃、土佐文教の上に大いなる足跡を印す事態が出来した。



それは鎌倉時代、五山の耆宿として禅儒の学徳並び称され朝廷や將軍の信任厚く、一世の師表と仰がれた夢窓国師が、鎌倉執権北条高時の母、覺海夫人の招請から身を隠すため土佐に下ったことに始まる。以来各地の僧徒、国師の徳を慕い、その門に参じ、ここに初めて臨済禅の土佐流入をみた。

国師は下向の途次、津野ノ庄に錫を留められた模様であるが、長岡郡五台山西麓に到り、入江を眼下に臨む景勝の地に庵を開かれ、碧巖録よりとって、その入江を吸江<sup>(17)</sup>、庵を吸江庵と名付け、夢窓の座禅石と共に今に残る。国師は土佐に止まること一年二ヶ月、覺海夫人の探索厳しく遂にその招請に応じ鎌倉に赴いた。

後、後醍醐天皇に召されて仏法を講じ、また足利尊氏は国師に帰依し厚い信任を寄せた。しかし国師は道ならぬ武家の専横を憤り、南朝を崇め、次の様に心情を吐露した。

「悲哉武臣、遂墮譏諛陳謝不及永沈逆臣之謬而已」<sup>(19)</sup> 朝権衰微し武家が天下の権を恣にした時代において、己の生命を賭けて真の勇氣と高邁な識見を披瀝したもので夢窓の尊王の精神を窺い知ることができるものであり、これこそ後年の土佐学を形成する文教の真髓である。

夢窓の土佐滞在は永くはなかったが、年齢的にも学徳共に円熟の境に到達しており、吸江に播いた一粒の文教の種子は吸江の法燈と共に法弟義堂、絶海及びその衣鉢を継ぐ五山の禅僧によって守り伝えられた。

### (三) 五山の文教と吸江庵

#### (1) 義堂

義堂、名を周信、号を空華道人という。夢窓国師法弟夥多ある中で、絶海と共に二大俊英として五山の双壁をなした。

義堂に關しては、日々の坐作進退を録して自らの警策に資するために記した日記『日用工夫集』がある。十八歳以前と入寂近い時期については門弟が記した様であるが、京都鎌倉兩五山に深い關係を有する義堂の記した日記である故に、禪學史上は勿論、記録に乏しい南北朝の政治、文教上貴重な史料である。義堂は自ら『日工集』という略称を附していたというが、現在は自筆の原本は遺存せず、抄録『空華日用工夫略集』が存するのみである。

日工集によれば、義堂は後醍醐天皇、正中二年（一三二五）に土佐高岡郡東津野村に生れた。「元弘元年、七歳、入小学、依邑里松園寺淨義大惠、誦法華經及諸儒書」とある。土佐には、これより七、八百年前より神社、寺院が処々に建立されていたから、宗教活動に伴って教化施設として寺子屋の前身に当るべき教育がなされていたことが推察される。なお翌年に次の記述がある。

義堂一日於家藏雜書中探得臨濟錄一冊而喜而讀之宛如宿習父母怪之以為天授又就別処集置珍玩種々者洎諸經書令師取之乃於中揮取玉扁広韻爛壞者自裱裝而秘之入咸作奇異想周念道人曰師之祖父某學儒釈之教專修禪那謁嘗由良國師參禪問道且白日願得禪錄一卷以為理性學本國師乃與臨濟錄是本也師之令父亦爾常時誦淨土三部經不離身云々

八歳で臨濟録を喜んで読んでおり、祖父が儒釈の教を学び由良國師に參禪し、請い与えられたのが、この臨濟録であり、また義堂の父も淨土三部經を身から離さなかったところをみても津野における精神文化の高さを明示すると共に義堂が幼にして儒釈の家学の中で呼吸していたことが察知される。

義堂は十七歳で再度上洛し、郷土にゆかり深い夢窓国師に入門した。その精進の効、特に顕著で十九歳で師より紫扇（悟りの象徴）を与えられた。その後、当時の碩学、虎関師鍊、円月中巖につき、学才益々向上を極めた。

正平七年（一三五二）土佐に帰り恩師夢窓の開いた吸江庵に住し師の遺蹟をしのんだ。

翌年上洛、この時既に夢窓門下に在った法弟絶海と共に竜山徳見の教を乞うた。

正平十三年（一三五八）再度、土佐五台山吸江庵に入り、行基開基の竹林寺の文殊菩薩を拝し、更に西方三十里に在る故郷津野山に帰り老親を見舞った折の次の詩がある。

#### 礼罷文殊赴家省親

礼罷文殊下五台　白雲飛処首重回

好将一滴独鉇水　要洗爺娘眼裏埃

翌年、足利基氏の招請により関東へ下り、鎌倉円覚、瑞泉に住し、基氏に学を勧め治道を説いてよく之を補佐した。鎌倉は師、夢窓国師止錫の地で師を恋う因縁もあるが、時恰も天朝受難の折であり、師夢窓の尊王、円月中巖の尊王抑覇、虎関師鍊の国体を重んずるなど、夫々、縉衣儒学者の精神を継承する義堂にとって鎌倉での護良親王の悲運を偲ぶ時、断腸の念を禁じ得なかったのであろう。次の詩を賦している。

#### 東光寺弔大塔兵部郷親王

塔影稜々半入空 王孫曾此洒啼痕

獄中劍氣衝天起 門外兵塵蔽日昏

山鳥忽驚竜鳳質 野童何識帝王尊

興亡不上禪僧眼 只見靈光巋独存

こうした義堂の皇室を尊び、大塔宮を悼み奉る尊王精神と親に孝なる心情こそ、土佐文教の示す道に他ならない。基氏卒後、氏満を補佐し、また管領上杉氏の施政にも貢献し、二十余年間鎌倉に在って上下の信望を集めた。天授六年（一三八〇）將軍義満は義堂を招いて京都、建仁に入寺させた。

翌年、義満のため孟子の新註書を講義した。晩年、南禅に入り、義満は南禅を五山の上位とし義堂の徳に報いた。義堂は六十四歳で入寂した。その遺著に「義堂和尚語録」「日用工夫集」「空華集」「禪儀外文抄」「東山外集抄」「枯崖漫録抄」「百丈清規抄」「古今雜集」がある。<sup>(20)</sup>

## (2) 絶海

絶海、名を申津、蕉堅道人と号し津野氏の一族で義堂と郷里を同じくし延元元年（一三三六）義堂より十一歳あとに生れた。

十三歳で上洛、天竜の夢窓国師の法弟となった。師、夢窓より「他日、臨済宗を背負って立つべき者」<sup>(21)</sup>と目され、十六歳で国師より戒を受け大僧となった。この年夢窓は入寂し門下に在ること僅か四年であったが生涯の基盤は夢窓の下で築かれた。

その後、法兄義堂と共に建仁に入り竜山徳見に参じた。この間十二年、一日として坐禅、読経を怠ったことはなく「精進幢」と呼ばれたとい<sup>(22)</sup>う。

正平十九年（一三六四）既に鎌倉に在った義堂を訪ねて円覚、建長の間を歴遊して義堂と共に教化に努め、基氏の信任も受けた。

正平二十三年（一三六八）明に渡海し、禅に、書、詩に精進し、その評高まり、時の皇帝太祖に召され、日本の熊野の古跡について詩をつくる様命ぜられ次の詩を賦した。

#### 応制賦三山

熊野峰前徐福祠      満山薬草雨余肥

只今海上波濤穩      万里好風須早帰

#### 御制賜和

熊野峰高血食祠      松根琥珀也応肥

当年徐福求仙薬      直到如今更不帰

日本の僧侶、文士、海を渡って皇帝に謁見した例はあっても、帝前で詩を賦し皇帝の和の詩を賜わった者は古今、絶海一人という。

絶海の詩才は我が国文学史上重要な地位を占めるが、学識においても深厚を極め、殊に禅学、宋学伝授に貢献大であったことは義堂と共にその功を後世に遺している。

絶海は硬骨の人で権力に媚びず幕政に与る身ながら所信を貫き、義満に直言して、その意を害し隠棲したことがあった。いささか後悔していた義満は義堂の言によって絶海に帰るよう使を出したが之に応じなかった。義満に依頼された細川頼之に泣いて訴えられ漸く上洛したという。

当時、四国管領であった細川頼之は吸江庵が荒廃したので再興するよう絶海に命じているが、絶海も度々吸江に来庵した様である。<sup>(23)</sup>

七十歳で遷化した<sup>(24)</sup>が、その遺著に「蕉堅稿」「四会語録（絶海録）」等ある。

### (3) 義堂と絶海の詩文

室町時代、文教の中心は五山に在り、義堂、絶海は、その中でも傑出し、白眉と称された。頼山陽は、夫々の遺文を評して、

「五山僧侶、頗為<sup>レ</sup>瘦硬絶句」其中巨擘有<sup>レ</sup>若<sup>ニ</sup>義堂絶海、頗雄奇有<sup>ニ</sup>台閣儒紳不<sup>レ</sup>及<sup>ニ</sup>処<sup>ニ</sup>と述べている。<sup>(25)</sup>

江村北海は「絶海義堂世多並称以為<sup>ニ</sup>敵手<sup>ニ</sup>、余嘗読<sup>ニ</sup>蕉堅稿<sup>ニ</sup>又読<sup>ニ</sup>空華集<sup>ニ</sup>審<sup>ニ</sup>一禅壁壘、論<sup>ニ</sup>学值<sup>ニ</sup>則義堂似<sup>レ</sup>勝<sup>ニ</sup>絶海<sup>ニ</sup>如<sup>ニ</sup>詩才<sup>ニ</sup>則義堂非<sup>ニ</sup>絶海敵<sup>ニ</sup>也絶海詩非<sup>ニ</sup>但古昔中世無<sup>ニ</sup>敵手<sup>ニ</sup>也」<sup>(26)</sup>と評している。

義堂は学者、絶海は詩人の趣、顕著で、義堂は温厚篤学で常に学を講じ道を説き教導に努めて師表と仰がれた。他方絶海は才気煥発、超然と詩境に遊び得る天才で、二人は肉親の如き交りを終生続けたにかかわらず、その特性を大いに異にした。

斎藤拙堂が「室町氏之時無文章、然余觀僧義堂空華集、頗有可誦者、最喜其深耕說、文字非瑕疵、然說理核實、意在筆先、今世文章家、能無愧乎」<sup>(27)</sup>と評した義堂の深耕說を左に掲げる。教育的にも含蓄深いものである。

### 深耕說

空華叟郊居無事出游泛觀<sub>二</sub>田野<sub>一</sub>桑柘之間有<sub>二</sub>大麥同<sub>レ</sub>畝而異<sub>レ</sub>熟者<sub>一</sub>怪<sub>レ</sub>之質<sub>二</sub>諸老農<sub>一</sub>曰惰農為也問<sub>二</sub>其所以<sub>一</sub>曰凡地耕而淺者所<sub>レ</sub>種之物必早熟而不<sub>レ</sub>茂深而耕者所<sub>レ</sub>種之物必晚成而肥碩是以善學<sub>レ</sub>稼者思<sub>二</sub>乎耕之淺<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>患<sub>二</sub>成之晚<sub>一</sub>也而彼惰者用力弗<sub>レ</sub>專所以耕有<sub>二</sub>深淺<sub>一</sub>而熟有<sub>二</sub>早晚<sub>一</sub>也矣嗟乎今之吾徒也耕<sub>レ</sub>道不<sub>レ</sub>深而患<sub>二</sub>名晚<sub>一</sub>者豈無<sub>レ</sub>愧<sub>二</sub>於老農之言<sub>一</sub>也耶余竊有感<sub>二</sub>于中<sub>一</sub>遂書以告<sub>二</sub>同學端介然<sub>一</sub>端介然深耕者之徒也。<sup>(28)</sup>

一方絶海の、他に比肩するものなしと謂われた詩才につき、北村沢吉博士は、

「日本に漢詩なし。日本の漢詩なるものは、日本の所謂漢詩にして、支那の所謂漢詩にあらざるなり。(中略)然るに今独り之あり、奇なる哉絶海(中略)絶海が詩は但に古昔中世に敵手なきのみに非ず近時の諸名家と雖も恐くは甲を棄てて宵遁れむ。(中略)日本上下二千年間真の漢詩あるは独り我が一絶海のみ」と称賛した。<sup>(29)</sup>

次に絶海の作数篇を掲げる。

呈<sub>二</sub>真寂竹庵和尚<sub>一</sub>

不堪長仰止　渚上寄高踪  
流水寒山路

深雲古寺鐘　香花嚴法界　冰雪老禪客  
重獲霑真藥　多生慶此逢

姑蘇台

姑蘇台上北風吹　過客登臨日暮時  
麋鹿群遊華麗尽　江山千里版圖移  
忠臣甘受属鏤劍　諸將愁看姑蔑旗  
回首長州古苑外　斷煙疎樹共凄其

後醍醐帝廟看梅　廟在龜山多宝院

乘輿南狩不<sub>レ</sub>時回　遺廟西山雲一隈  
昔日何人調鼎手　老禪掃雪独看梅

(4) 宋儒の学与義堂

我が国における宋儒性理の学は、元の帰化僧、一寧一山により始まり、虎関師錬と夢窓により義堂及び絶海へ継承した。これら中国の禅僧により渡来した新学は我が国の文教界に新風をもたらした。義堂はこの程朱の学が禅の機軸と合致するを以てこれを提唱した。



弘和元年（一三八一）九月廿二日の日工集に將軍義滿が「昨日儒學者講孟子書、其義各々不同、如何」と質したのに対し、義堂は「余曰、所見不同也、近世儒書有新旧二義、程・朱等新義也、宋朝以来儒學者、皆參吾禪宗、一分發明心地、故註書与章句学廻然別矣、四書尽於朱晦菴」と答え、また同月廿五日に「儒書新旧二学不同如何」ときかれ「漢以来及唐儒者、皆拘章句者也、宋儒乃理性達、故釈義太高、其故何則皆以參吾禪也」と説明しているが、義堂の提唱する儒学は漢唐訓詁の学から、宋儒の性理学へと志向し儒學者は皆禪宗に參ずると、禪宗と朱子学との結びつきを述べている。

(5) 義堂、絶海の文教と施政への貢献

五山の禪徒は、ただ文学を事とするに止らず、その卓越した識見を以て施政に参与して治国平天下の実を行った。

義堂は將軍、諸候の活動を良く補佐したが、学を勧めることをその要諦とした。左のように日工集にその跡を見ることができる。

応安二年五月七日「上杉親衛来話京師応藏主講孟子書俗人多就而聽之余乃告曰以文学而補政務公宣力学」

応安三年十一月十二日「凡今天下居樞家者当好文学不然往々失政公蓋勤兵部文字云々」

応安三年十二月廿三日「凡治天下執樞柄者当勤文学以益其智不然闇昧多不通達」

応安四年二月十八日「府君（足利氏満）入寺焼香余引接方丈而茶話余勤以学文且云凡治天下国家無不以文先君（足利基氏）専勤文学願継業以副外護之望君領之」

応安四年九月二日「雜賀帶一僧来濃州土岐人今在粟田口（豊長）儒宅受尚書余話曰凡読書先須正心而読之詩三百思無邪是也今時學者心術不正故読書雖多無所施用只呼為書篋而已是無他以心不明也」

応安七年十月廿四日「府君入保寿而炷香茶話之次余白昨蒙拜借吾妻鏡中說吾日本乃敬仏崇神之国也云々余又說每々命儒令講孝經并貞觀政要等是乃国家政道助也何則凡人不知仁儀五常之道則不遵君命不遵君命則政事不行也自今以後宜召粟田口儒人<sup>(豊長)</sup>令講孝經・政要等且亦命諸寺長老令講經錄則庶幾国家安寧尊徳日新也府君頷之」

永和元年七月十三日「君問治国之政要余乃白云凡治天下文武二道也武則治乱而已文則為政之術也（中略）然則古今治天下国家非文武二道則不可也凡人為上者憫下為下者敬上是則非生而知之以學而知之也不學而知者未之有也千万以學為政治之備則幸甚府君喜曰吾雖不敏請事斯語矣」

以上の如く學を第一義とする義堂の精神は後年の寺子屋教育の基をなすものである。

絶海もまた幕府の顧問として政治外交に参画し、多年の碩學を以て良く国外との国交文書応待の大任をも果した。

#### (6) 吸江の法燈と文教

文教未だ充分華開かぬ頃、五山の高僧、夢窓国師が土佐のほぼ中央、国府を隔てること数里の地に吸江庵を開いたことは、この地の僧徒等にとっては耳朶を打つ驚きであつたに違いない。漸次その門に集い弟子の礼をとる者多く、奈良、平安朝以来初めて五山の禪風が土佐の地に根をおろしはじめた。

以来、五山と土佐の間には一連の命脈が結ばれ、津野の庄より殆ど時を同じくして義堂、絶海が夢窓の徳を慕つて門弟となり、師の衣鉢を受けて幾度か、ここ吸江庵に住して仏法と儒學の伝導に努めた。後、吸江庵は管領細川家の保護を受け時には幕府の朱印寺として、また朝廷の勅宣の地位にまで達したこともあつた。<sup>(30)</sup>

絶海晩年の頃から次々とその法弟が吸江庵を守り、一時は吸江の寺道隆盛をきわめ、僧徒、俗者参集する者多くなり往々にして禪堂の清浄を汚す者さえ現れるに至り、吸江方式なる寺規を定めて厳しくしたほど庵の法燈が輝いた

こともあった。<sup>(31)</sup>

下って津野之高の子、旭岑瑞果が、南禅、相国に往したのち吸江庵に入り祖師絶海の志を受けて守った。夢窓以来、南海の避地に仏燈を掲げて禅儒の学を伝え、後年土佐におこる海南朱子学の萌芽が、これら禅寺に胚胎温存されて斯学発展の土壌をなした。(以下次号)

- (1) 山本大『高知県の歴史』三〇頁～三四頁、四五頁～五三頁。
- (2) 宮地佐一郎『土佐歴史散歩』四頁～一五頁。
- (3) 前掲四頁。山本大『高知県の歴史』七〇頁。中島建依別『土佐文化史伝』三四頁～三六頁。
- (4) 宮地、前掲『土佐歴史散歩』一六〇頁。
- (5) 前掲一一九頁。高知県女教員会編『千代の鑑』二二〇頁。
- (6) 安岡大六『野根山烈士伝』一九〇頁。
- (7) 高知県青少年団『土佐先哲精神顕彰叢書(二)武市瑞山先生』六三頁～六四頁。
- (8) 土居晴夫『坂本龍馬とその一族』一二五頁～一三九頁。中野文枝『坂本龍馬の後裔たち』三五頁～四一頁。
- (9) 高好種恵氏とのインタビュー(昭和六一年十月一八日、高知県高岡郡東津野村高野において)
- (10) 宮地仁『おばあちゃんの一生―岡上菊栄伝』二〇頁～二三頁。
- (11) 中島建依別『土佐文化史伝』五頁～七頁。
- (12) 前掲八頁～一二頁。
- (13) 土佐史談会『土佐史談』第四七号、小関豊吉「土佐小史」六頁。
- (14) 高知県立図書館刊『皆山集』第一卷五七四頁。
- (15) 平尾道雄選集『土佐武士道と仇討ち』一九頁。

- (16) 東津野村教育委員會編『東津野村史』一〇頁、一五頁、一六頁、一七頁。
- (17) 寺石正路『南学史』六八頁。
- (18) 東津野村教育委員會、前掲三二頁。
- (19) 寺石、前掲七〇頁。
- (20) 前掲、八九頁。
- (21) 東津野村教育委員會、前掲四七頁。
- (22) 前掲四七頁。
- (23) 寺石、前掲一〇八頁。
- (24) 前掲一〇一頁。
- (25) 北村澤吉『五山文学史稿』八頁。
- (26) 寺石、前掲八四頁。
- (27) 北村、前掲三六四頁。
- (28) 日本神京瑞龍山南禪寺慈氏院沙門釈周信義堂『空華集』卷第十五—六。
- (29) 北村、前掲三九七頁、三九八頁。
- (30) 寺石、前掲一一頁、一一九頁。
- (31) 前掲一二七頁。